

もっと
よく知ろう

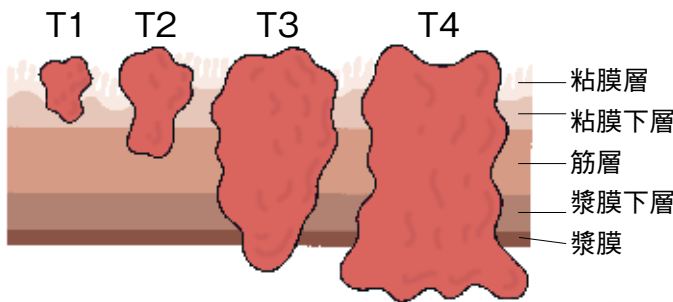
胃がん

胃がんは日本人に多く、かつては全がんのうち胃がんによる死亡数が男性では3分の2、女性では3分の1を占めていました。最近では減少傾向にあるものの、肺がんに次いで第2位の死亡原因となっています。とくに40歳を過ぎた方は、定期検診を欠かさず受けましょう。

胃がんは早期発見すれば
完治するがん！

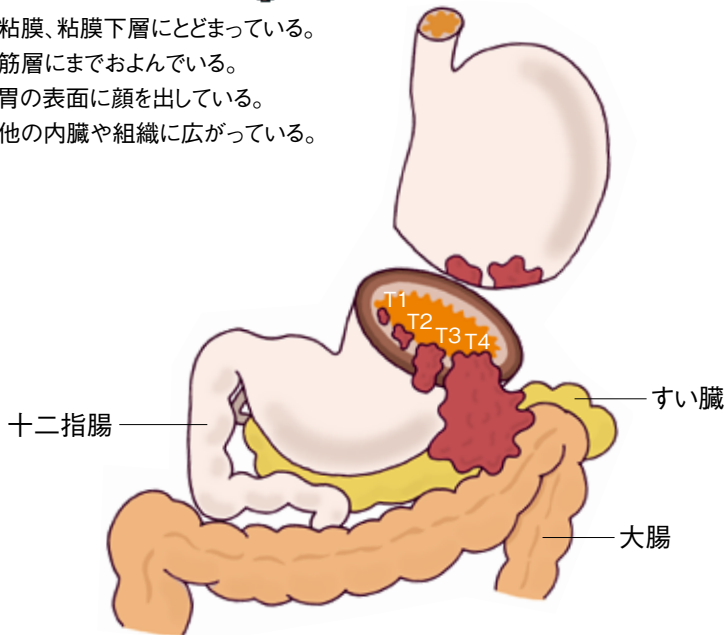
胃がんは、がんがまだ胃の粘膜の表面にある早期のものと、内部まで入り込んでいる進行がんとに区別できます。早期がんの場合、開腹せずに内視鏡を使い粘膜付近にあるがんを切除するだけで完治できます。しかしほとんどの胃がんの場合、早期がんの段階では痛みなどの自覚症状がなく、なんとなく怖いからと検診も受けないまま過ごすうちに進行してしまいうことが多くあります。

その内視鏡的粘膜切除術(EMR)は、カメラを先端につけた管を口に入れて胃の内部を映し、その映像を見ながら



- T1:胃がんが粘膜、粘膜下層にとどまっている。
- T2:胃がんが筋層にまでおよんでいる。
- T3:胃がんが胃の表面に顔を出している。
- T4:胃がんが他の内臓や組織に広がっている。

がらがんの周囲にワイヤーをかけ、高周波で焼き切る治療です。胃の粘膜や粘膜下層に発生した早期がんは、そこにとどまっているうちに内視鏡で完全に切除できれば、5年生存率はほぼ100%期待してよいでしょう(図中



早期発見できないと

ただ、がんが筋層や漿膜下層、漿膜

いつでもどこでも
検診を受けること

など胃の内部にまで浸潤し、さらに胃の外側へと胃壁を突き破って進みだすと、付近のリンパ管や血管に侵入して別の臓器に転移する可能性が生じます(イラスト参照)。しかも、早期がんで行う内視鏡による治療は、開腹手術がないため簡便で身体負担も軽く、ごく短期間の入院で済みます(日帰りで行う施設もあります)が、進行がんの場合は、ほとんどが開腹もしくは腹腔鏡により、胃の3分の2程度の部分切除か全部を取り去る全摘手術を行います。

近年、食生活や環境の変化に加え、がん検診の普及で早期発見が進み、胃がんが原因で死亡する人数は年々少しずつ減っています。しかし40歳を過ぎると男女とも胃がんの死亡率が急増する傾向は変わらず、とくに男性は女性の2倍という結果では、胃がん対策はまだ充分とはいえないでしょう。

いま日本では、国保組合や自治体が行うがん検診、個人で選ぶ人間ドックなど、さまざまな場所に検診の機会が用意されています。せっかくのチャンスを利用せず、進行しないと自覚症状が出にくい胃がんの発見が遅れることのないよう、積極的に検診を受けるようにしましょう。